

平和のスピーチ

静岡県立浜松西高等学校中部部 一年 高西 莉奈

長崎平和公園。春休みに私が訪れたとき、そこには静かで穏やかな時間が流れていた。噴水の水が朝陽をあびてきらきらと輝き、名物だというアイス屋さんの屋台には小さな行列ができている。バラの形のアイスは口に入れるとすつと溶け、ハトがこぼれ落ちたコーンをついばむ。そして私の上には、どこまでも青く澄んだ春の空が広がっている。七十四年前の晴れた夏の朝、ここで何があつたか忘れてしまうほどに、美しい景色だった。でも、平和の泉の正面に刻まれた被爆した少女の手記は、平和を願う世界各国からのコメントは、静かに、熱をこめて私に語りかけてくる。忘れないで、と。

私がこの本に興味をもったのは、長崎での体験が忘れられなくて、原爆とは何だったのかもつと知りたくなったからだ。あの公園に原爆を落としたアメリカという国の人たちは今、原爆投下をどう思っているのか、も。読み進めるうち、私は原爆の引き起こした数々の悲劇に、世界中を巻き込んだ戦争の引き起こした数々の惨劇に、大きなショックを受けた。米大統領の嘘、南京虐殺、峠三吉の詩、ユダヤ人迫害。ほとんど何も知らないまま、私はあの日、平和公園にいたのだ。全ての出来事が、公園の情景と重なって、思わず涙がこぼれた。「知らなかった」ではすまされない、と心の中が灰色の雲でいっぱいになった。押しつけても押しつけても、覆いかぶさってくる。しかし、読み終えた本をそつと閉じたとき、その雲は消え、私の心にはずつと青い空が広がっていた。

私がそう感じたのは、「二人の持つ力」に気付けたからだ。八人の

高校生によるデイベート形式で進められていくこの本の最終ラウンドで、原爆投下は人類の犯した罪であり、そのあやまちを二度とくり返してはならない、と原爆否定派のメイが述べた後に行なわれた、原爆肯定派のナオミのスピーチ。私はこのスピーチに、心からの大きな拍手をおくりたいと思う。ユダヤ系アメリカ人であるナオミは、はじめ、ナチス・ドイツの同盟国であつた日本への原爆投下は当然だったというスピーチを行った。けれども彼女の考えは、一冊の本によって変わった。イスラエル軍によって愛する家族を失った一人の医師が、「それでも私は彼らを愛する」と語り、対話を求めようとする行動が記されたその本に深い感銘を受けたのだ。そして最終ラウンドでは、日本への原爆投下はまちがいであつたし、何より自分は平和を愛する一人人でありたいと彼女のスピーチをしめくくった。一冊の本が持つ力、家族を殺された一人の医師の言葉が持つ力、討論に参加した一人一人の持つ力。示されたたくさんの力のなかでも、私の印象に強く残ったものは次の二つだ。

一つ目は「主張する力」。「私」を外に伝える力だ。日系アメリカ人なのにと驚かれながらも原爆肯定派を選んだケン、自分たちを助けてくれた日系人に感謝と敬意を表したテキサス隊の兵士。日本人を傷つけたアイリッシュの子孫でありながら、日本人と結婚したメイの父。彼らを代表して、メイの父はこう話している。「僕は自分がアイリッシュシユであることをほこりに思っているよ。あるものごとを人種単位でとらえたり、ある人を人種によって『こういう人だ』と決めつけたりするのは危険だし、まちがっている。僕は思う。」私もその通りだと思ふ。私たちも、日本人という人種である前に、自分の意見や考えをもつ、一人の人間なのだから。

二つ目は、「広げる力」だ。これは自分の考えを世界に発信し、広

めていく力。このことについてはダリウスが、「最初に叫び声を上げるときには、一人でもいいんだ。個人の反対からすべては始まる」と話している。自分で声を上げ、反対意見や提案を述べるのは、想像以上に勇気のいることだ。しかし、ジャスミンの言葉にあるように、すべての運動は一人の行動から生まれる。なぜなら集団を作っているのは一人一人の人間だから。そうであるなら私も声を上げなくてはならないのだ。たとえその声が、小さなものであったとしても。

ここまで考えて、気付いたことがある。それは、なぜこの本がデイベート形式で書かれているかということだ。きっとそれは、言葉が人の心を動かすということを証明するためだろう。物語の中では、スピーチ一つで、肯定派にも否定派にも会場が何度も揺れ動いた。言葉がこんなにも人を変えられるのなら、原爆は、戦争は、差別は、なぜ必要だといえよう？ もし集団の中の一人一人が、言葉をもち、言葉の力を信じ、力の限り平和を創造しようとしたならば、たくさんの尊い命は失われずにすんだのではないか。

さあ、今度は私の番だ。自分の意見をもったその瞬間から、私は九人目の主人公だ。私の言葉で、私の考えを、私を伝えるスピーチを、今始めよう。

書名	ある晴れた夏の朝
著者名	小手鞠 るい
発行所	偕成社